

原子力の社会現象を“心”を通して観てみたら

エネルギー問題に発言する会 会員 宅間正夫

3.11 の東京電力福島第一原子力事故以降の原子力と社会とのかかわりを見るにつけ、“心”という切り口から観てみないと起こっている様々な現象の因果関係に腑に落ちないことが数多あるようだ。「心理学では」と構えられるとズブの素人が何を言うか、と言われそうだが、臆面もなく素人なりに気が付いたことを述べてみたい。

1. 福島第一原子力の事故時退避に関する吉田調書と「朝日」記事のこと

発電所現場も含めて電気事業に半世紀近く携わり広報部門にも籍を置いたことのある筆者は、5月20日の朝日の記事を見たときの第一印象は「うそだ、あり得ない」であり、続いて「この記事は新聞社内でどういうチェックを受けているのか」という疑念であった。明治初期の民営電気事業者の発足以来、電気事業者には、電気が止まることは恥だとばかりに「停電させない」・「私的事情を顧みず復旧に全力を尽くす」という電気供給への心根が刷り込まれており、それは特に現場の技術者・技能者には“誇り”とともに、供給支障事故防止と早期復旧に対する“責任感・使命感”につながっている。これは自由競争時代の電気事業の開始から100年以上にわたる電気事業の歴史で培われた「公益を担う者」の体質であると考えられる。筆者も入社直後の技術現場実習で配電の停電事故や発電所緊急停止事故の時の「目の色が変わった現場の技術・技能陣」を見てショックを受けて「電気屋」としての根性のすごさを見せつけられた一人で、その記憶は電気事業に携わった間、消え去ることは無かった。これに対する理解なくして現場を語れず、またこれあるからこそ太平洋戦争後の電力再編成で主流を占めつつあった国有化論に対して、供給責任を自己の行動倫理とする民営事業化を主張した松永翁の論が社会に受け入れられたもの、と筆者は信じている。

表に見えた現象のみを「理」によるつじつま合わせで解釈して当事者の心に迫る手間を省いた「情」を欠く記事は感動を呼ばない。また脱原発の「空気」に便乗したいのが見え見えの記者根性はいただけない。虚報によって我が国に対する国際的な評価を貶めたマスメディアの猛省を促したい。

つい思い出してしまうのだが、ムラサキツユクサの放射線による変色が騒がれたころ、朝日系のさる著名なキャスターが「変色した例が身近にあったら番組に連絡を」と呼びかけたことがある。変色しなかった事例についてはどう扱うのか、変色との因果関係をどう調べるのか、説明がない限り放射線の害へのアジテーションに使われそうで、何とも非科学的としか言いようのないもの。今回の吉田調書の件にもどこか似てはいないか。

2. 「安全・安心」について

一般に「安全」は技術（理性）、「安心」は心（感性）の問題と言われるが、この頃は「安全・安心」と安易に併記されるようだ。しかしこの 2 語の間には“深い谷”があるのは周知のとおり。大まかに言って原子力では、3.11 以降強化された深層防護思想による広義の「安全」を構築し、また「安心」に対しては例えば、第一に「安全への信頼」を得ること（許認可制度、事前評価と事後監視、情報開示と公開説明会などの整備）、第二に万一の事故時に対する被害軽減や事後の救済に万全期すこと（原災法や原賠法などの法制化）、がなされている。しかしなお、社会はこの”深い谷“を越える状況にはなかなかならない。「不安感」が社会に共有された「空気」となって原子力の先行きを不透明にしている。再稼動問題は、「空気」が変わらないと物事が進まず、火中の栗を拾う為政者の姿も見えず、責任があいまいにされたままなんとなく進んでいく、といった悪しき風潮の我が国の社会を象徴しているようだ。

「不安感」が個人の問題であるなら、自覚ある個人は自己の内面を見つめて不安の根源を抉り出し、「理」をもってこれを克服する、いわば「我思う、故に我あり」のごとく自己の主体性を取り戻せれば・・・と思うが、自己を取り巻く「空気」にながされ、あるいは「空気」を読んでそれに乗る、といった没主体性のはびこる社会ではそうもいかないのか。現代の科学技術社会における人間の考え方・生き方を考えさせられる。解は容易に見つかりそうにない。

3. 日本人の災害観

故廣井脩先生は日本人の災害観を「天譴論、運命論、精神論」に整理された。「天譴論」は災害は天が人間を罰するために下した罰、とするものであり、例えば、関東大震災は当時の日本の大陸政策への後ろめたさ等の心理から来る日本人全体の自業自得、ともいう。「運命論」は自然の災害と人間の生死は避けられない運命、としてこれを甘受するもの。これは「運命論」によって災害の悲劇性を心理的に減殺・緩和できる効用がある、という。「精神論」は、防災対策を講じて災害を克服するより、それに代えて人間の精神や心構えを強調するもの。太平洋戦争中の「神風」期待に通じるものだろう。

この災害観に照らしてみると、3.11 東北大震災では過去の知見に基づく防潮堤高さを無力化にするような津波災害は「運命論」として甘受せざるを得なかった、とみなされようが、福島第一原子力災害は「運命論」では片づけられなかった。原子力設備も防潮堤も同じように「人為による構築物」であるにもかかわらず、原子力事故には「天譴論」が支配したようで、そこには、あくまで私見であるが、いわば「原子力という技術を扱う専門集団が謙虚さを失って天を恐れぬ所業」に踏み込んだ、という根強くかつ根深い潜在意識が社会にある、と言わざるを得ない。我が国の原子力発電が半世紀以上にわたって電力供給に

貢献し、国のエネルギー安全保障を支えてきたにもかかわらず、未だに原子力と、社会及びそれを構成する個人との間にはかなりの距離があることを感じざるを得ない。何故か。

素人なりに一つの仮説を提示するなら、原子力には、平和利用への実現性とともな“原爆が太平洋戦争の終結を早めた”などという「正」の面と、一方で、3.11事故のようなことが起こりうる、あるいは“原爆が痛ましい被爆者を生んだ”という「負」の面と、相反する意識が日本人の心の中に深く潜んでいて、ことあるごとにこれが顕在化し、尽きることがなく繰り返すと言えないだろうか。

さらに言えば、原子力の導入時の社会の熱狂的な原子力期待は、原子力を戦後復興期の我が国の産業発展に不可欠なエネルギーと見なしたが故に、原子力の「負」の面を心中に抑え、「正」の面に過度に希望を見出そうとする、いわば心の「過剰適応」状態だったのかもしれない。であるならば、今回事故のよう「過剰適応」が裏切られたときに、原子力に対して「過剰反応」ともいえる「負」の感情が過激に表れたのではないか。原子力は決して「理」の次元のみでは扱えないことを3.11福島事故で改めて痛切に感じざるを得ない。

心の深層に住みついた感性の記憶は容易に消え去ることがなさそうだ。しかし「時間の経過」だけが解決策というのでは、科学技術社会そのものが成り立たない。今こそ文系・理系の専門家と市民との共同作業による個人レベル・集団レベル・社会レベルの心理学的研究・実践と、それを進めるシステムが不可欠だ。

4. 放射線・放射能への不安・恐怖の背景には

筆者は、原子力の立地地域の方々にも同じような心理があったのでは、と素人ながら思う。原子力の立地に当たって地域では熾烈な論争があった。そして地域の発展のために立地を是とした方々の多くは、原子力に不安を抱きながらも国・事業者の安全確保の姿勢に信頼を寄せすることで、不安を覚える自らの心を抑えた「過剰適応」状態にあった。しかし、事故が現実になると、裏切られた気持ちは原子力・放射能の不安・恐怖に「過剰反応」して、科学的合理的知識を超えて過度に不安・恐怖に向かうことになり、国や専門家が信頼されにくい土壌が育まれてしまうのでは、という気がする。

また、心理学に「ランゲ・ジェームス」の法則があるという。19世紀に唱えられた説で、通常は「怖いから逃げる」のだがある状況では「逃げるから怖さが生まれる」という。3.11事故をこれに照らしてみると、事故が起こって、その状況や放射能の様子も知らされないままに突然避難を指示され、十分な知識もなしに闇雲に逃げているうちに次第に恐怖が増してきて、科学的合理的な判断を超えて心に刷り込まれていくのではないか。こうした状況での刷り込みは

容易なことでは払拭されにくい。帰還に当たっての除染レベルに敏感にならざるを得ない。3.11 事故のこうした経験をしっかり踏まえて、避難計画に当たっては、緊急時の情報提供の在り方に、こんなことも配慮されるべきことであろう。了